特別研修

月例研究会　議事録（　9　月）

2007 年度第　4　回

報告題名　団地形成による間伐の実現のための必要条件に関する研究	
報告者：西橋　俊 （**所属分野**）：地域計画学	**日時**　9 月 27 日（木） **場所**　第 7 講義室
座長　鈴木	**議事録担当者**　飯塚
出席者　長谷部、木谷、工藤、伊藤、齋藤、米倉、冬木、川島、朴、澁谷、水澤、小山田、阿部、池田、鈴木、西橋、飯塚、大森、高嶋	

報告要旨

現在、日本の林業は木材価格の低迷によって衰退し、多くの人工林が間伐を放棄されたままとなっている。その一方で、地球温暖化対策の 1 つとして、間伐の実施が強く求められている。これらに対して間伐を実施する際には、複数の森林所有者による団地を形成し、効率的に実施することが必要となる。

本研究では陸前高田市気仙町の今泉地区の取り組みを事例として取り上げ、団地化による間伐を実現させるための必要条件を整理する。結果として、①補助制度、②労働力の自己調達、③計画作成の担当者、④森林所有者への説得係、というように必要条件を整理することができる。さらに本研究では④に注目し、その条件を満たす人物の人物像、そのような人物像が形成されるための要因を、今泉地区の歴史や文化と関連させながら明らかにする。

質疑・応答

鈴木：調整役グループの始まりのきっかけが分かれば教えてほしい。

西橋：まだ調査中である。今、本家にあたる世代がちょうど戦後直後に二十歳ぐらいだった。そこで時代が区切られている気がする。例えば、1 人の例だと、戦後の食糧管理制度の麦の供出の際に役場が不正しているとわかり、自分の地域は自分が関わりたいという思いを持って取り組んだ。それがちょうど 21 歳のときだった。その人が中心的に活発にやって市の農業委員会の会長にもなったことがある。そういうことが誰かに教えられてやったかはわからない。

鈴木：元々はオンブズマンのような形で自分達でやっていこうというのが始まりだということか。

西橋：そうである。ただ、形式的なつながりではなくて、同じ考えをもった人たちが集まった。皆が不公平にならないようにやりたいという考えを持った人が集まると聞いた。

木谷：よくまとまっていると思う。ただ、今回の「組織像を明らかにする」というのは研究の目的ではない。それに結びつく政策的な話がないといけない。そのためにはモデルが必要になる。一般的に考えて、意識と社会資本が上手く組み合わさって行動に出てくるというイメージでとると、今は意識のほうが今後の課題点としている。社会的資本のほうは調整役グループの有無が今後の課題ということで方向性は見える。
研究目的としては、こういった組織が形成されていくことを支援する政策を考えるときの情報を与えてくれるような論文であればよりよくなると思う。

工藤：調整役グループというのは、間伐のみでなく色々な場面で言われている。これは本分家関係や先輩後輩関係といった人脈ネットワークがベースになっている。しかしこれは非民主的・半封建的・前近代的組織ではないか。そしてこうした人間関係は日々崩れていくものではないか。
貴方のいう調整役グループというのは再生復元力があるのか、持続性があるのか。

西橋：その点については、今、若手の人がいるので、そういう人たちにあたってどうして調整役をやっているのか調べる。
もう一点つけくわえるならば、調整クループが生まれる要因を明らかにすることを今やっている。崩れかけているものを復元する要因も抽出したい。

工藤：もっと民主的・理論的な組織をつくったらよいのではないか。
また、かなり利益誘導的な役割を果たしているのだが、その話が抜けている。

西橋：確かに利益は子孫の財産としての利益を得ようと考えているので、利益誘導型で自分のためにという部分もある。しかし、プラスアルファして互いに依存しあうような意識がある。

工藤：それの持続性の根拠はなにか。利益誘導と離れてのそういった気持ち・ネットワークの持続性の根拠は何か。

西橋：根拠については課題にしたい。

伊藤：この論文を農業経済学を基礎にして考察していくのならば、どこかで経済的な分析が必要になる。例えば、中間組織的なものが存在しないとすればどのくらいコストがかかるのかといった犠牲計算のような分析があったほうがよりよいだろう。
今回は調整役やその後継者がいるという事例だが、広くは所有者がそこに住んでいない、所有者が誰だかわからないということも多い。そうしたこと考えると、とても組織を作るというのは無理だろう。少なくとも今、山村に限らず、調整役をやろうという人はいないだろう。
今回の事例は数少ないケースなのではないか。もっと広い視点で見たらよいと思う。

米倉：開発論的な立場から言うと、参加型開発ということが現在よく議論されている。それとよく似ている。住民主体の組織や制度が行政サイドにとって手段になるのか、行政の代替的機能・補完的機能になるのかを見分けないといけない。
また、そうしたときに参加する人々のオーナーシップがどこにどうあるのか、その辺りの見極めがほしい。
貴方は血縁的な持続性というのがコアとしてありそうだと言っていたが、そういうものがオーナーシップのコアとなっているのかどうか整理してもらいたい。

澁谷：団地形成がなぜ必要なのかということがよくわからない。非効率な事業者ならば退出してほしい。なぜあえて非効率な事業者を残して団地を形成しなければならないのか。
また、この話は間伐のみが目的になっている。間伐だけできれば良いように聞こえる。上手く儲かる仕組みを作ればよいと思うのだが、そういった観点が抜けているように思う。

西橋：当面、間伐というのが林業の大きな課題であるので、私の中心課題として扱っている。

澁谷：間伐が上手く行くかというかというのは、間伐材が高く売れることや、上手く流通できるといった部分が大きいように感じる。

西橋：それもあるが、間伐というのはあくまで優良物を残すというのが主目的である。その先の利益というものがある。
また、大規模に林野をもっている人はわずかである。小規模な人しかいないからこそ団地化が必要になってくる。

澁谷：そういった小規模な人は林野を手放してもらえば、大規模化が進むと思う。